

方針 9 世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる。

〔国際交流〕

日本では被爆・戦後60年の昨年、アジアの国々では、日本の侵略からの解放60年の記念の年であり、また、ベトナムではアメリカの侵略からの解放30周年の年でもあった。これらアジアの国々との草の根の文化交流が盛んに行われた。

04年のアジアの風フェスティバルの成果を発展させる形で、韓国へ、5月に「5・18光州事件」25周年アジアンマダン、8月には100人を超える代表団を日本AALA、東京労音との共同でおくり、光復（解放）60周年の国家行事に演奏参加したのをはじめ、国鉄のうたごえ中心のベトナム解放30周年記念ツアー、「悪魔の飽食」全国実行委員会主催の第2次中国公演、長野、大阪を中心とした光の種子をうたう合唱団の訪韓公演などたくさんの演奏交流が行われた。

また、ひろしま祭典では韓国からキム・ウォンジュンさん、ウクライナのナターシャ・グジーさんが妹のカーチャさんと演奏、京都ひまわり合唱団の演奏会にサム・トゥッ・ソリのメンバーでもあるソン・ビョンヒさんを招くなどの交流も行われた。

日本の侵略戦争を肯定するような動きが強まる中で、アジアの国々の人々と市民レベルで平和のための交流を盛んにすることは、アジアの平和、世界の平和の大きな力になることを確信した。また、これらの交流の参加者が、日本の中で、歴史の真実を語り、あの侵略戦争の反省から生まれた憲法九条をまもる世論を大きくするためにがんばることをあらためて決意させるものとなった。

和太鼓、民謡・民舞の分野でも国際交流が盛んになっている。

方針 10 和太鼓と民謡・民舞のネットワーク化とシステム化を促進する。

〔郷土のうたと踊り〕

ひろしま祭典全国郷土合同として発表した「生命の詩」を作曲の今福優さんのリードで成功させることができた。「生命の詩」講習会として地元広島をはじめ、兵庫（約30人）、東日本でも特別講習会として（約40人）実施したが、その多くが祭典参加にまで結びつかなかったのが反省点としてあげられる。

本年は東日本でしか開催できなかった「郷土のうたと踊り講習会」（170人）では、「銚子の早打ち」を地元保存会から、また「荒馬」を東京のプロ民族歌舞団「荒馬座」を講師に迎えるなど、つながりを広めながら成功させてきている。

また、東日本では10年来のとりくみとなっている「江戸やっこまつり」を開催、初参加のチームも多く、年々充実してきている。兵庫では、和太鼓と民舞の祭りを開催した。プロチームとの連帯活動が発展してきており、神戸の太鼓衆団輪田鼓は、震災10年を祈念してプロ集団「わらび座」と「田楽座」との三者による「ふるさとのにぎわい」を開催。川崎では、風チームからメンバーを出している荒馬座公演をとりくみ、田楽座にメンバー

を送り出した跳鼓舞では、田楽座調布公演の準備に入っている。

これからの郷土活動の課題は、専門家との創造連帯と教育指導、全国講習会の充実、郷土センターの設立、情報・教育者・楽譜整理・記録・創作等々の体系化、郷土教育者の組織化、メニュー化、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりプランとしての計画が考えられる。

和太鼓・民舞仲間をうたごえの輪の中に迎えるとりくみも大切にしたい。